

1996年 8月

劔岳事故報告書

信州大学山岳会

はじめ

去る1996年8月26日、剣岳八ツ峰にて転落事故が発生いたしました。事故者は手足に傷を負い、富山県警のヘリコプターで救助されました。救助活動において御協力頂きました富山県警山岳警備隊、学生部、顧問教官、山岳会OBの方々には深く感謝致します。

事故の概要

事故者 松藤 康公 理学部1年

事故発生日時・天候

1996年8月26日 12時20分 曇り(ガス)

事故発生場所

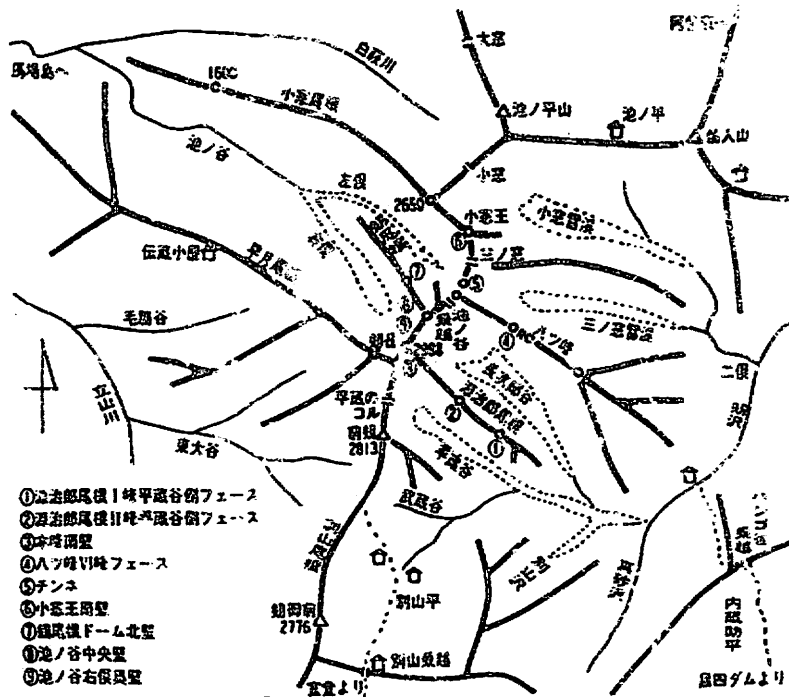
北アルプス剣岳八ツ峰5、6の科尔から5mの所

経過

八ツ峰6峰から5、6の科尔へ下降中、足を滑らせ三ノ窓側へ30m垂直落下。歩いて熊ノ岩ベースキャンプへ戻り、そこでヘリコプターに救助される。

事故者の状態

左手、右膝挫傷 両足打撲 (左手4針と10針、右膝5針縫合)



山行計画

1996年度 夏合宿 8月23日～8月31日 (実働8日予備1日)

日程 8/23 松本＝黒部ダム～内蔵助平T. S

24 T. S～ハンゴ谷乗越～長次郎谷～熊の岩B. C

25～29 B. Cより剣岳周辺の登山および攀走

30 B. C～内蔵助平～黒部ダム＝松本

31 予備日

登山ルート ハン峰、チンネ、剣尾根、源次郎尾根とその平蔵谷側、本峰南壁の各ルート

縦走ルート 長次郎谷～峠、北方稜線～仙人冠～剣沢、別山尾根

立山三日

エスケープルート 谷路下山、室堂下山

最終下山時刻 8月31日 21:00

留守本部 豊田 裕之 (OB) 岩村 孝之 (OB)

所轄警察 大町署 富山県警

メンバー

CL: 山内 哲文 (4) S. L: 伊藤 勇太郎 (4) 長瀬 徹哉 (3)

原田 亮介 (2) 堺 義行 (2) 川井 純 (1) 川村 朋子 (1)

田中 基樹 (1) 中島 辰哉 (1) 平松 由布子 (1)

松藤 康公 (1) 菱谷 水郷 (1) 野田 聡 (1)

行動記録

1 事故発生まで

26日の予定 4パーティーに分かれて八ツ峰6峰の各フエース登はん

(山内パーティー) L山内 中島 松藤

Dフエース富山大、Aフエース魚津校、Aフエース中大

(長澤パーティー) L長澤 川井

Cフエース剣稜会、Bフエース京大、CフエースRCC

(堺パーティー) L堺 伊藤 平松

Aフエース中大、CフエースRCC、Aフエース魚津校

(原田パーティー) L原田 田中

Dフエース久留米大、Aフエース中大、Bフエース京大

*堺パーティーの伊藤(4)は中大登はん後、後から合宿に参加する予定
の麦谷(1)、野田(1)を迎えに剣沢小屋まで行く。

26日の記録 (山内パーティー)

4:00 起床、 5:25熊の岩B、C発 霧、 6:00六峰Aフエース下岩小屋 霧 ここからパーティーごとに分かれる。

6:45 Dフエース富山大ルート登はん開始
全6ピッチ 3ピッチ目で雨にふられる

10:45 登はん終了 霧 Dフエースの頭で1時間休憩

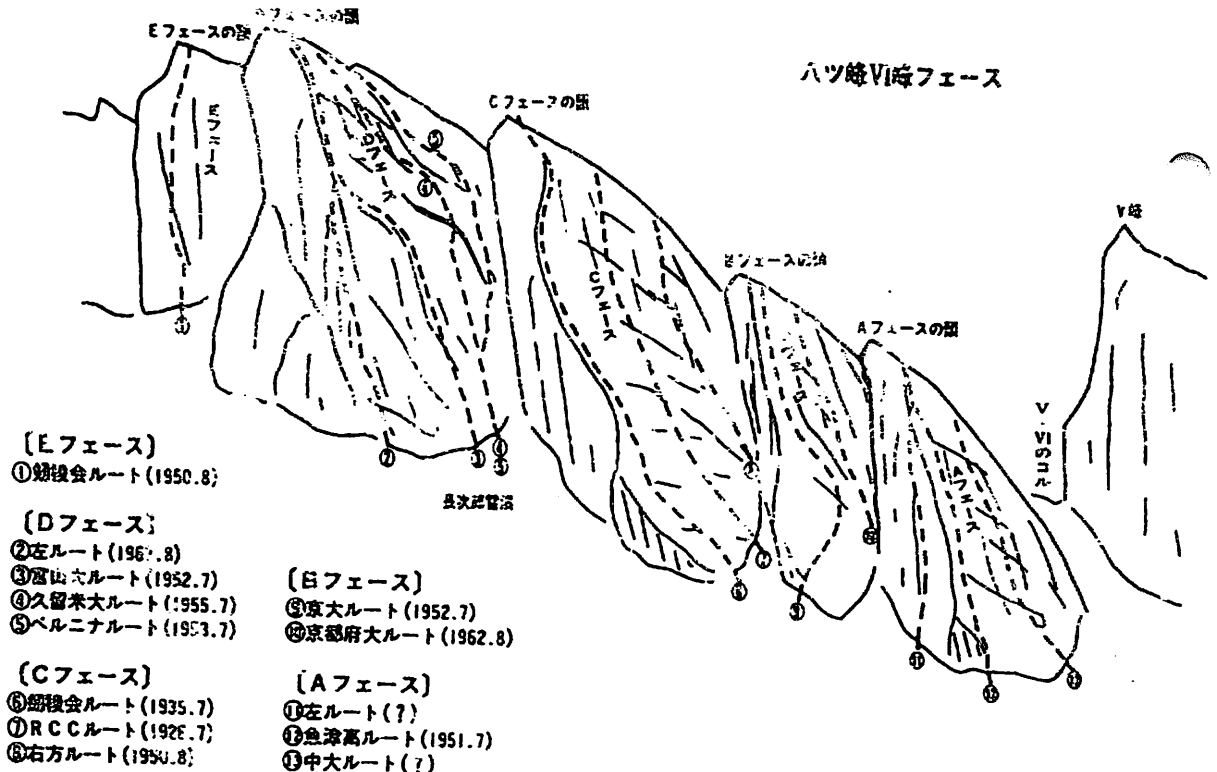
11:45 Dフエースの頭発 霧

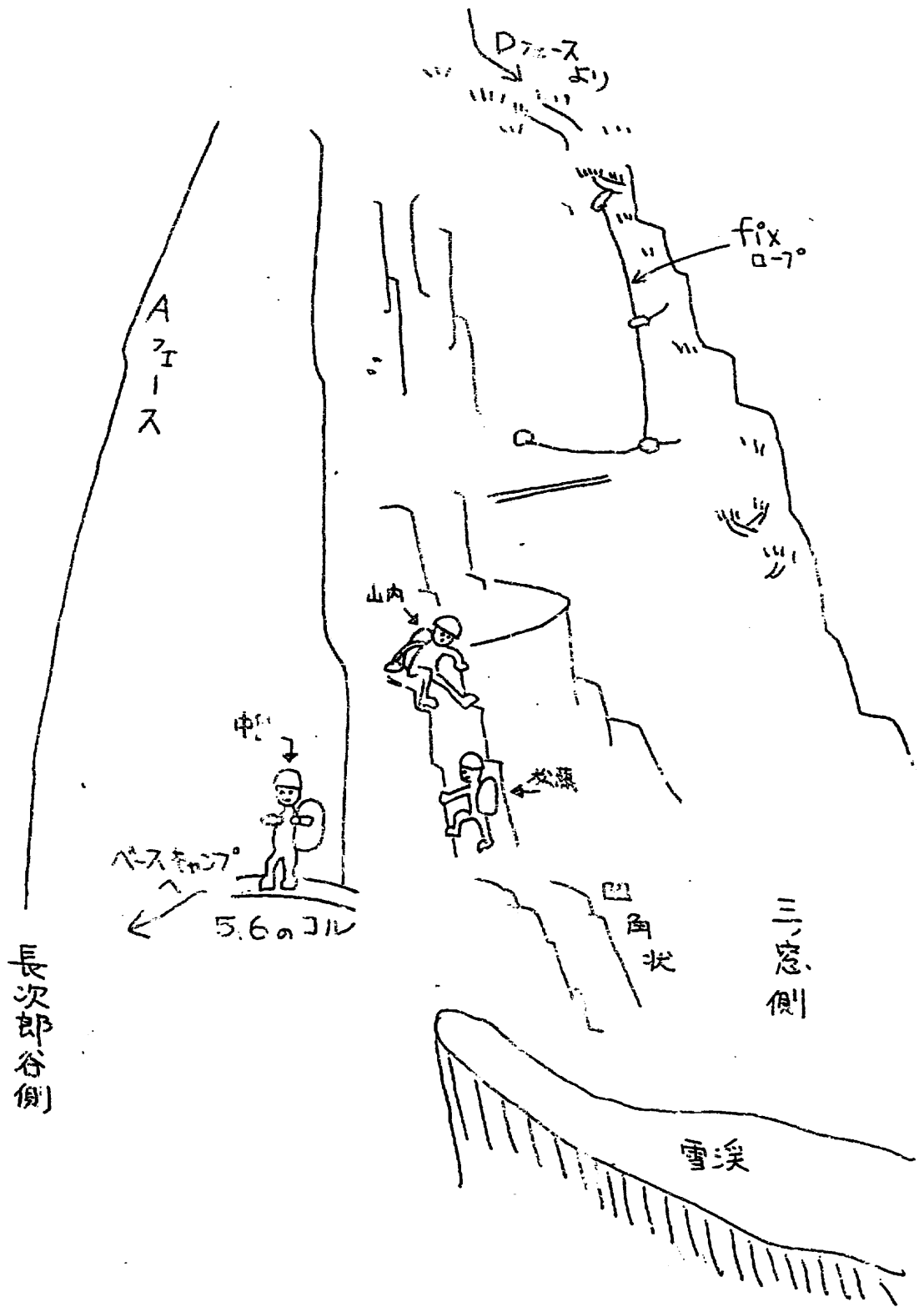
12:15 f i xロープ通過開始 霧

12:20 5、6のコルの5m手前にて岩壁が足を滑らせて転落。

事故の詳しい状況

Dフェースの頂から5、6のコーンへむかって、中島(1)、松藤(1)、山内(4)の順で下降していた。悪天のため予定のルートは登らずベースに戻る事になっていた。Dフェースからfixロープまでは草付のガレ道で、fixロープからコルまでは急な岩場の下降。中島はクレッターシューズ、松藤は山靴、山内はプラスチックブーツを履いていた。fix通過で松藤は「こわいな」と思いロープをつかんで下降する。fix通過を終えて所々クライムダウンしながら、あと5、6枚で5、6のコルにつく所まで行く。その時、中島は5、6のコルに着いていた。松藤はクライムダウンで両手をつきながら左足をおろすと、それがずるっとすべり後ろにひかるようにバランスを崩す。すぐに足をついて立て直そうとするが、足場が届かず、そのまま落ちる。岩の凸角状の斜面を30m程、足を下にして転落し、懸梁の下にもぐりこんでとまる。山内が「大丈夫かー。」という、「痛いーす。」のコール。止まった時のままの状態で手首をおさえ、うずくまっている。山内がザイルをもっており、左手の傷口をバンダナで縛りザックをはずし、歩かそうなのでゆっくり起きて5、6のコルまで登り返す。コルにつくとすぐにおねこる。





- 14:45 山岳警備隊と山内の交信始まる。事故の詳しい状況（発生時刻、場所、経過、事故者のフルネーム、ケガの状態）を伝える。そして「今日中に松藤を剣沢まで、なるべく多くの人數で運んでください。またヘリによる搬送も検討しているので、黒部川上流、熊の岩上空の視界、風向、風力を伝えてください。」と言われる。
- 15:00 山内、長澤、堺、川井、田中、中島が松藤について剣沢に行く事に決定。準備を始める。
- 15:10 山岳警備隊よりヘリが飛ぶので待つようにとの連絡。
- 15:25 県警ヘリ「つるぎ」が熊の岩に降り、松藤を収容し飛び立つ。
- 15:35 「つるぎ」は剣沢ヘリポートに松藤を下ろし、別件の救助へ向かう。松藤は応急処置をうける。
山岳警備隊より山内へ、松藤が剣沢に降りたとの連絡。これにて山岳警備隊との交信を終了する。
- 16:55 「つるぎ」再び松藤を収容し富山県立中央病院へむかう。
伊藤より山内へこの事を連絡。伊藤は明日富山の病院へ行く事にする。
伊藤、派出所の電話をかり、OB留守の豊田に事故報告する。
- 17:05 豊田から学生部へ第一報。
- 17:15 松藤、病院に着く。
- 17:30 伊藤と山内、今後の予定について交信。
- 20:00頃 松藤が豊田、山田先生、実家に電話する。

3 その後の行動

- 27日 B、C～剣沢～本峰縦走を全員で行う予定だったが、雨のため山内のみが剣沢にいる愛谷、野田を迎えにいく。伊藤は下山して病院へ。本隊は沈黙。
- 28日 ハツ峰登山の予定だったが、雨のため沈黙。伊藤は再び入山、B、Cにて本隊と合流。
- 29日 天気の回復が望めないので、昼堂より下山。

2 事故発生後

- 12:20 松藤が転落、岩溪の下にもぐりこんでとまる。すぐ、山内がお
り、松藤と5、6のコルまで登り返す。そこで松藤をねかせる。
- 12:30 無線機で他パーティーと連絡。「5、6のコルにて事故発生。
リーダー部員は医療缶、ツェルト、シュラフをもって5、6の
コルへ来て下さい。」長澤、堺パーティーはベースに、原田パ
ーティーは岩小屋にいた。伊藤とは連絡とれず。松藤は痛みと
ショックが強くて、震えていた。セーター、ツェルトで暖かく
した。その時Dフェースから下りてきた社会人パーティーの方
々が手伝ってくれた。
- 12:45 原田5、6のコル到着。ピンカンの事故報告書を書く。
- 13:00 長澤、堺、医療缶をもって到着。松藤の手の傷を消毒し包帯を
する。松藤が歩けそうだったのでその日はベースまで戻り、次
の日に何人かついて下山する事に決める。
- 13:23 コルを出発。山内、原田が装備を持ち、長澤、堺、中島が空身
で松藤を補助する。社会人の方が松藤のザックをもってくれる。
- 13:30 原田が剣沢にいる伊藤と交信。事故を伝える。
- 13:50 岩小屋着。松藤ビスケットを食べる。全気嚢袋を渡るためアイ
ゼン、ビッケルをつける。社会人の方々と別れる。名前を尋ね
るが、名乗るほどの者ではないと言っていってしまう。
- 14:00 岩小屋発。
- 14:10 伊藤、剣沢で表谷、野田と合流。
- 14:25 松藤B、C着。テントにねかせる。
- 14:30 山内、伊藤と交信。「松藤は明日下山させる予定。もし今夜
何かあるといけなから、一応剣沢の警察の人に事故報告をし
て無線を聞いておくように頼んでほしい。」
- 14:40 伊藤、剣沢派出所にて事故報告をする。山岳警備隊の人は「明
日から天気崩れて、何かあった時はもう遅い。今すぐ下山させ
なさい。」と言ってB、Cの山内と直接交信する事になる。

問 題 点

1 行動について (山内パーティー)

・その日登った富山大ルートでは、核心部で雨に降られ、少し手強かった。そのためDフェースの頭についた時にホッとして気がゆるみ、下りる時は注意力に欠けていた。

・山内は、松藤、中島の二人とも前の日に2回同じ道を下っているのだからと判断して二人を前に行かせて、中島、松藤、山内の順で歩いた。その日は雨が降って岩がぬれていて、前日とは条件が違う事を考えると上級生が先におりるべきであった。

・松藤が滑落した場所は、f i xロープは張ってなかった。リーダー会では張る必要はないと判断した。普通に注意して下りれば問題なく行ける所である。松藤にはもう少しで5、6のピルへつくという矢のいるみからきた不注意があった。

上級生はそこで一言注意を促す言葉をかけるようにしたい。

2 救助活動

・松藤は事故直後、ショックが強かったため一晩B、Cで寝て、落ち着いてから下りしたが良いと判断したが、ケガの状態、次の日の天候を考えるとその日のうちに下山と判断すべきであった。山での病人、ケガ人は、半以上よくなる事はないと考え、なるべく早期に下山させる事が原則である。

・警察への報告の仕方があいまいであった。まず救助依頼をするかしないかをはっきりとさせ事故のくわしい状況を伝えるべきだった。第三者へ事故を知らせる場合には、ピンカンにある事故報告書を記入し、5W1Hの情報を正確に伝えなければいけない。

・事故発生後の主な判断はほとんど山内が行ったが、その場でリーダー会を開くべきであった。

・無線については、会で開局すべきである。

・医療缶にはオキシドールをいれ方がよい。

・事故報告はOB留守より学生部に先にするべきだった。

松藤の報告

「事故を起こして」 松藤 康公

その日は曇っていた。僕、山内さんと中島との三人パーティーで富山大ルートに登った。その途中、雨が降ってきた。寒くて手がかじかみ、とても時間がかかった。上についたときは緊張と寒さのため疲れていた。雨はもうやんでいてホッとしていた。そして爽快感とともに岩登りの疲労に少しずつ引き込まれている自分を感じていた。

少し休んでから下っていった。「今日もう終わりだな。」と思っていた。fixロープが張ってある所を慎重に下り終え、急な岩場を後ろ向きになって下っているとき、ぬれている岩に足を滑らせてしまった。「アッ。」と思い岩をつかもうとした。しかし10kg程度しかないザックが後ろに体を引く。一步後ろに下がり、次の岩に足をおこうとしたが、足は岩ごとどかす下に落ちていってしまった。「どうにかして止めないと。」必死になって止めようとした。がとまらない。目の周りのものすべてが回っている。岩にぶつかるたびに、息のつまるほどの衝撃が自分の体に伝わってくる。「死ぬのさ。」そうとしか考えられなかった。幸運にも体は止まった。雪渓の下のギヤベールが緩くなっている所に入りこんでいた。「助かった。」とホッとした。と同時に体に激痛が走った。左手からは血が出ている。体中のあちこち打っている。意識ははっきりしている。しかしどうしてなのか分からず、「山内さん助けて下さい。」と叫ぶことしかできなかった。すぐに山内さんが来てくれて、この場は危ないから安全な所まで上がろうと行った。幸い自力で歩けたので安全な所まで行き休んだ。山内さんがシーパーでベースキャンプにいる人と連絡をとり、中島は寒くないようにと服を着せてくれた。すぐに上級生がかけつけてくれた。通りがかりの人も見守ってくれた。最初は恐怖で頭がいっぱいだった。落ち着くにつれてみんなに迷惑をかけたという申し訳なさ、感謝の気持ちでいっぱいになった。

B、Cにリポートされた後から戻り、少したってからヘリが来た。僕は剣岳を構えながら病院へと向かった。

事故を起こして本当に多くの人の支えがあって僕が山に立ちまわることができるのだということを実感した。

会計報告

事故処理経費

交通費	室登=立山	¥4110
	立山=富山	¥2220
	富山=病院	¥500
電話代		¥2000
食費		¥2241
剣沢療養代		¥1500
雑費・新聞代等		¥1521

計 14972

これらの費用は夏合宿会計からいただきました。

松島の対応費は本人の負担となりました。

おわりに

今回の事故の直接の原因は以上のとおりですが、この事故の背景には現在の会のあり方、合宿のあり方が関わっていると思われます。事故というものは一瞬の気のゆるみからおこるものだと、今回思い知らされましたが、気のゆるむ瞬間を間違った時に伴ってしまった合宿のあり方にも問題があったのです。今後、事故をゼロにするために、合宿のあり方、会のあり方をもう一度考え直し、かえてゆく必要があります。

最後に救助活動においてご協力して下さった皆様に深く御礼申し上げます。

どうもありがとうございました。

山内 哲文